

1960年代後半の京都大学・理学部・数学教室、そして私（4）

松本和一郎

(1966年度入学、1970年度学部卒業、1971年度大学院進学、1974年度同退学)

1. 全国全共闘会

1969年の夏は、ストライキ中とはいえ、やはり夏休み気分で、大した活動もしないし、大した事も起こらなかった。そろそろ秋も近いし、何か始めなければ、と思っていた矢先、9月はじめであったか、新聞報道で「全国全共闘結成」の見出しを見て、また記事を読んで仰天した。全共闘運動の、下からの盛り上がりを駆動力とするあり方から言って、「全国」には明らかに無理があり、さらに全国全共闘の主体は新左翼8セクトであるとの記事内容にも強い違和感があった。学生運動が強い政治色を帯び、「全共闘」と「新左翼セクト」が共同行動を取ることが多い状況ではあっても、組織論において全く異なる「全共闘系」と「新左翼セクト」が1つの組織に納まることは私には考えられなかった。

こういうときは黒田末寿君に聞くに限る。黒田君は数学にも興味を示していたが、自然人類学の方に進んだので「主として数学を修める」のカテゴリーでの数学教室の同窓会メンバーではないと思う。黒田君は理学部闘争委員会のメンバーとして活動していたが、温厚な人柄で、常々政治に関する私の質問に分かり易く答えてくれていた。理学部闘争委員会の一部は、今はないが、数学教室の南側にあった木造の倉庫(?)を根城にしていた。そこに出かけて行って「全国全共闘」とは何か?と問うた。日頃の温厚な黒田君が「あんなものは意味がない。似非全共闘だ。あんなものはハッパフメフメ(8派踏め踏め)だ」と声を荒げた。(当時、大橋巨泉の「ハッパフミフミ」が流行語だった。)やはり全共闘運動とは無縁のものかと納得したが、山本義隆氏がそのような全国全共闘の議長に就任したことには得心できなかった。「流れ」で引き受けざるを得なかったのだろうか?

黒田君はその後、アフリカに住み込んでピグミーチンパンジーの観察を行い、帰国後に観察記「ピグミーチンパンジー 未知の類人猿」(筑摩書房 / 以文社 第34回読売文学賞)を出版した。それを読んで「黒田君は自然科学者である前に詩人だな」と思った。全共闘活動に関わる人々には詩人が多かった。

山本義隆氏は相当の秀才なのだろう。氏が書いた物理学の本を読んだが、理解しながらついていくのに苦労した。ずっと後になってであるが、氏が物理学史の連作を世に問い、高い評価を受けたことに、私はなぜかホッとした。

全国全共闘結成にいたり、私はそれまでの疲れがどっと出た気がして、ストライキ維持に限界を感じるようになった。

2. ストライキ解除

数学教室のストライキは、学科の学生集会に人が集まらなくなって、全体集会で語るべき学生からの意見も新たには出なくなった。こんな状況下ではストライキを活性を持って維持することはもう無理だと思うにいたった。再建数闘の他のメンバーも同じ意見で、ストライキ解除を学生集会に諮ることになった。しかし、ここに来て重い桎梏になったのが「在籍者の2/3の賛成をもってストライキを解除できる」という合意である。そもそも

在籍者の正確な人数も知らないし、同期に分属したメンバーの 2/3 すら学生集会に集まらない状況である。

学科主任の吉沢先生にはときどき先生の研究室に呼ばれて、学生側の現況を聞かれた。私はそのような意見交換は有益であると思っていたので、語って良い範囲内で情報を提供した。第1回目だけは銀閣寺の近くの中華料理屋（「ミンミン」よりずっと高級そうな店）で夕食を共にして吉沢先生が勘定を払った。そのようなことは要らぬ詮索を受けるから次回からはやめて欲しいとお願いした。「そのような詮索をする者は私が許さない」と先生はおっしゃったが、2回目からは先生の研究室で話をすることにしてもらった。（「許さない」とはどういう行動に打って出ることを意味するのかは分からないままである。）

学科会議に人を集める方法に苦慮している頃、吉沢先生から「会いたい」との連絡があった。用件は次回の全体会議の日程であった。学生集会が低調で、すぐに全体会議を開いてもらっても有意義な議論ができないことを伝えた。併せて、ストライキ解除の声も強くなってきているが、在籍者の 2/3 以上の数学科学生を集める方法に苦慮していることを話した。吉沢先生はしばらく黙っていたが、「次の学生集会はいつですか？」と問われた。日程は決まっていたので、日時と会場を伝えると「その日に必ず開いて下さい」と言う。学生を集める何か良い用法がありますか？問うと、笑いながら「まあ、考えてみましょう」とおっしゃった。これはすでに腹案を持っておられるな、と思ったが、聞いてもおっしゃらないだろうと思ってそのまま退去した。

さて、予定の学生集会の日、人数の確保は今日も無理かなと思ひながら会場の旧第3講義室に一步足を踏み入れると、教室にあふれんばかりの人の山である。しかも、同期の学生も多くいるが、見たこともない人も相当数いる。戸惑いながら、一番近くにいた学生（私より2つは上に見えた）に、「すみませんがどなたでしょうか？」と聞いてみた。「ご存知無いのも無理はありません。私は永田先生の代数学1（必修科目）の単位がどうしても取れないので、卒業をあきらめて下宿も引き払って田舎に帰っていましたから」とのこと。「それがどうして今日はここへ来られたのですか？」と問うと、「何日か前に“某月某日某時刻、京都大学数学教室第3講義室に集合されたし。数学教室主任 吉沢尚明”とのウナデンが来たんです。やめておこうかとも思ったのですが、用件が分からないから念のため用件を聞きにだけでも行ってみるか、と思ってきたのです」とおっしゃる。（若い人は知らないかもしれないが、「ウナデン」とは至急電報のことである。電報で十分早く着くから、料金の高いウナデンを私は使ったことがない。今なら、メールで全員に即時に、だが、昔は電報が唯一の高速伝達手段であった。）

そっと事務から全在籍者のリストが届いた。出席学生数を数えると全在籍者の 2/3 を優に超えている。これは今日を除いてストライキ解除のチャンスはないと思い、「ストライキ解除」を提案する前に、「本日の出席者の 2/3 以上の賛成をもってストライキを解除できる」との緊急動議を出した。これはほぼ全員の賛成を得られて可決された。次が「ストライキ解除提案」である。一応、ストライキの概要を語り、「今やストライキ解除しか学生自治の空洞化を避ける道はない」と提案趣旨を述べた。しかし、会場内のあちこちで「ストライキてなんや？」という声がある。下宿を引き払って田舎に帰っていた人には手短かな説明では何のことやら分からなかったのであろう。一方、「ストライキ貫徹！」の声も聞こえてくる。安保自動延長反対の政治運動に全力を注いでいる者から見れば「ストライキ解除」は辞書に無かったのであろう。情勢は混沌とする中、急遽準備した投票用紙で無記名投票をお願いした。出席者数は忘れたが、3の倍数であった。開票してみると、解除賛成が「2/3 マイナス1」であった。タッチアウトとがっかりしたが、投票総数が3の倍数より1少ない。アレっ？と思ったところに議長の河村君が「俺にも投票権はあるのか

なあ」という。勿論ある！河村君の票を開票すると（全く記名投票だが）「賛成」であった。ストライキ解除決定！腰が抜けるようによろめいた。

全共闘の活動は政治闘争に重きを移して学外ばかりになり、勢い学内ゲバルトも生じなくなっていたので、ストライキ解除の日をもって第5講義室（現理学研究科3号館南ウイングの1階南東角の部屋。ストライキ解除直後に談話室となった）での泊まり込みを中止した。久しぶりに下宿で、夜中に起きる必要が無いと思って眠るとぐっすり眠れた。「平和はいいなあ」と実感を持って感じた。私の反戦主義の原点である。



この写真が撮られたのは、ストライキに入
って間のない頃であり、「政治の季節」
にはまだ遠く、のんびりしていた。

左から玉木敏嗣君、竹本茂男君、浜田達
夫君。玉木君、浜田君は1970年3月卒、竹
本君、私は1971年3月卒。

玉木君は次回（第5回）、浜田君は最終
回（第6回）の文章に登場。竹本君は2回か
ら登場しているが最終回まで毎回登場。

右窓外に見えるのは農学部建物、真中
は（多分）昔の生協の倉庫。第5講義室の
窓はその後のリフォームで写真撮影当時と
は形や様式が変わっている。

ストライキ中、学生がたまり場に利用していた第5講義室（現談話室）にて

平和が戻ると、10ヶ月間ほど離れていた数学を無性に勉強したくなり、勉強を始めた。何から始めたか覚えていないが、しみじみうれしかった。そんなある日、北部食堂から出てきたら溝畑先生にばったり会った。先生がにこにこ笑って「どうですか」とお尋ねになるので、「久しぶりに数学を勉強するととても楽しいです」と答えると、先生は相手を崩して「数学の魅力にとりつかれると、なかなか逃れられないものですよ」とおっしゃった。後に長いおつきあいをお願いすることになるのだが、そのときの笑顔が先生の最高の笑顔であった。どんなに行き詰まってもどんなに忙しくても、私が数学の研究を続けられたのはこの笑顔が支えとなってくれたからである。

[思い出： カルミンおじさん] まだストライキ中の秋の心地よい日であった。ゆったりした気持ちで北部構内を南北に貫く道路を歩いていたらいきなり右腕をがっちり掴まれた。ぎょっとして見ると、この季節には早すぎる厚いオーバーコートを着た無精ひげのおじさんが私の腕を掴んでいる。さすがにそのみすぼらしさからして私服刑事ではない。というよりこれは“カルミンおじさん”である。“カルミンおじさん”とは私が勝手につけた渾名である。北部構内で学生がよくこのおじさんに腕を掴まれて拉致されていた。その折りに、必ずオーバーコートの左のポケットから包装紙を取り出した裸のカルミンを取り出して学生に勧めるのである。噂ではこの人は元化学科助教授で、熱病を患って職を退いたとのことであった。「農学部事務室はどこですか」と聞く。「あそこを右に曲がってまっすぐ行くとあります」と言っても「連れて行って下さい」と言って相変わらず右腕をがっちり掴んでいる。逆らうとまずいことになるかもしれないと思い、連れて行くことにした。道々、カルミンを勧められ、自己紹介をされた。元化学科助教授で熱病を患って職を退い

た、熱病を患った折りに鹿島建設だか大林組だかの「馬鹿の」とこの某が死んでもいないのに弔電を打ってきた、しかし、論文は歴史に消えていくが教科書は残る、「粉体化学(?)」という本を書いておいて良かった、君も本を書きなさい、とのことである。北部構内を2周して開放された。「本を書きなさい」ということだけは肝に銘じている。線形代数の教科書を書いたが、「超可微分函数」のタイトルで大学院生向けの本も書いている。依頼を受けて10年を超す。1章を除いてできあがっているのだが、最後の1章に思い入れがあってなかなかこれで良いと思えない。ほんとにできあがるのか心配だが、吉沢先生の心境が分かってきた。

3. ストライキ解除残念会

ストライキ解除後、数日すると誰言うとなく「ストライキ解除残念会」をやろう、ということになった。日を決めて、竹本君の下宿で(なぜか部屋は竹本君の部屋でなく、法学部の学生の部屋であった。とても広い部屋だったからかもしれない。)勿論、料理はスキヤキ!そちらは慣れた者が、コンロだ俎板だ鉄鍋だ、牛肉ネギ菊菜に豆腐糸こんにゃく卵!とぬかりなく揃えてある。後は酒だ。各自持ち込みでサントリー・ブラックだ角瓶だジョニクロまである。しかし、量が足りない。「酒買うてくるけど、何がええか?」との声に私が「焼酎!」。ビールに日本酒と焼酎もそろってカンパニー!スキヤキをつつきながら飲んでいると、「なんやこれ、まずいなあ、焼酎やんけ。誰がこんなもん買うてきたんや」「松本が買うてこい言うたんや」「松本、責任取ってこれ全部飲め。飲み終わるまで他の酒飲まさん」あこがれのダルマが目の前にあるのに飲めない!それにしてもまずい焼酎だ。後に、焼酎には甲種と乙種があって、宮崎で私らが飲むのは天然醸造の乙種、工業的合成焼酎が甲種とのこと。その甲種である。宝酒造さんには申し訳ないが、きわめてまずかった。うまい酒飲みたさに、残っていた5合ほどの焼酎を一気に飲んだ。飲んだら、立ってられないほどフラフラし始めた。私は今までに酒を飲んで酔いつぶれたことはあるが、立ってられないほどフラフラしたことはない。そのままずるずると横になり気を失った。どれくらいたったか、誰かが私を蹴飛ばして「松本、2次会行くぞ!」「オウ」とは言ったものの脚が立たない。別の誰かが「寝かしとけ寝かしとけ、疲れとんのか」。結局、竹本君の部屋に布団を敷いてくれてその上に引きずっていかれた。皆は出て行き、私はまた気を失った。どれくらいしてであろうか、ふと目が覚めて「ああ、天井が見える」と思った途端、その日食べたスキヤキと焼酎の半分消化済みのものが胃から太い柱のようになって鉛直に噴き出した。その勢いは壮観であった。しかし、重力がある以上、真上に上がったものは真下に落ちてくる。よけようと思ったが、脳以外、全く体が言うことを聞かない。開いたままの目から顔一面にドロドロが降りかかった。「くさー」と思った瞬間にまた気を失った。

次に目が覚めたのは翌朝(だと思う)早くであった。まだ竹本君は帰っていない。体を動かすと、大儀ながら動く。のろのろと起き上がって、銀閣寺に近い竹本君の下宿から百万遍の私の下宿に歩いて帰った。体全体からゲロの臭いが立ち上っているから公共交通機関には恥ずかしくて乗れなかった。下宿に帰ってしばらくすると、百万遍の角にある東山湯(今でも健在)が開く10時になった。とにかく自分が臭くて仕方がないから、とりあえず湯に行った。体を洗い、臭い衣類も洗い、さっぱりした。後に、アニメ「千と千尋の神隠し」を見た。千と名を変えられた千尋が最初に世話した客が“腐れ神”で、体に刺さっていた杭を抜くとヘドロが流れ出て、本来の“川の神”(能面の翁)の姿に戻り「良きかな」と行って去る。これを見たとき、「あ、あのときの私だ」と強い共感を覚えた。

しかし、今にして思えばこれは急性アルコール中毒で死にかけたのではないか。いまさらにゾットする。

[思い出： 宗教的覚醒] 実はストライキ解除残念会の後すぐに、気絶したのが急性アルコール中毒であったと認識したわけではない。それから30年ほどした頃、大学生の急性アルコール中毒死のニュースが流れたのを聞いて、「またか、愚かなことだ」と思ったが、ふと、30年前の私は急性アル中だったのではないかと思いついた。背筋が凍る思いがした。あのとき死んでいてもおかしくなかったのだ。クジラの潮吹きがなければ私は死んでいたかもしれない。すると、あのときクジラの潮吹きに助けられて生き延びたのは何か超自然なものが「まだ死ぬな、生きて働け」と言って助けてくれたような気がしてきた。「宗教的覚醒」である。大学の教員をしていると、文部(科学)省がアレをしるコレをしると言ってくるのが的外れが多くうんざりする。私はそれらに対して一貫して「労多くして益少なし。応ずべきでない」と切り捨てていた。ところが、覚醒の後、「文部科学省の提案は現場を理解していないから無理だし無駄だが、文部科学省が問題提起したことには一定の汲むべきものがある。負担が多くなならない方策を工夫して見ようよ」と言うようになった、かくして、その当時赴任していた龍谷大学でかなりの数の施策を起こした。当然、スタッフの仕事は増える。宗教的覚醒をしたものにとっては何ら違和感のない方向転換だが、仕事を増やして欲しくない人々にとってはいたって迷惑なことであつたらう。宗教的覚醒も、チーム全体にとっては良し悪しである、と今にして思う。

4. 大胆な改革

さて、10ヶ月かけて大騒ぎしたのだが、その結果どのような改革が成されたのか？少なくとも京都大学理学部においては、大胆な改革が成された。学生側の要求と一口に言っても、学年が1年違うと要求も相当違う。我々1966年入学組はすでに学科に所属しているので、学科単位の要求であるが、1年下は所属していないし所属を否定していたから学年としての要求である。

1年下の要求の方が分かり易いので、そちらから挙げると、個別分野に蝸壺化しないための「学科制撤廃」である。これが理学部協議会で認められた。実験装置などの準備のためなどであろう、学生は各学科に登録するが、人員の制限は無いし登録と無関係に受講できる。さらに、“無所属”という登録も許される。

我々の学年の要求は(数学科において)「必修の撤廃」である。何が必要かは各学生が主体的に判断すべきことで、強制されるべきものではない、という主張である。そもそも学科が無くなったので、学科としての必修科目の設定ができないから理学部には必修科目が無くなった。理学部内で開講されるすべての講義・演習・実習・実験から所定の単位数を確保すると卒業できる、となった。私たちの1年下から適用される。

私の高校の後輩のN君は3回生の終わりに「松本さん、卒業単位が揃た」と言ってきた。聞けば、各学科の実験を取りまくると、実験は単位数が多いので、卒業要件単位数を確保できるとのことであった。

そうはいつでも、多岐にわたる理学の中の何を学んだのかは卒業証書に書いておかないと、卒業生の能力分野が分からない。そこで、卒業証書には「主として〇〇を修める」と書くことになった。ただ、誰がどういう手続きで〇〇を判定するかが問題だ。時間が無かったのか、きわめて単純に、主にその学生に関わった教員(以下「教員」と呼ぶ。卒業研究も必修でないから、このような「教員」を特定できない学生もいるかと思うが、そのような例外の場合は「学生が適当に選ぶ」、であったようである)に学生が希望の分野を申

告すると、教員が単位取得状況などの実情に照らして認定することになった。「教員」は全分野のどれでも認定できた。これで大概はうまくいく。しかし、時として学生が「主として〇〇を修める」を希望しても、あまりにも〇〇分野の単位数が少ないと、〇〇が専門の「教員」は承認に難色を示すこともある。その結果、「教員」は自分の専門分野以外ならば相対的に良心が痛まないから、〇〇以外の第2希望の分野であれば安易に認めてしまうことがある、と聞いたことがあるが、定かでない。

数学教室独自の改革は、たとえば大学院入試である。従来の入試では数学（基礎と専門）・語学（2カ国語）・面接で、すべて主導権が教員にある。研究をしたいと言って受験するのに、受験生が主体的に研究への熱意や計画を語る場がない。是非、受験生が主体的に語れる場を作って欲しい、と申し入れてあった。これが実現した。従来の試験項目に加えて、「あらかじめ受験生が興味を持った定理や理論についてレポートを提出し、30分の持ち時間でその内容を説明する」という試験が加わった。1日目が筆記試験、2日目が新しい形式のプレゼンテーション、最終日が面接、である。

学部においては、卒業研究が“講究”として制度化された。あるいはこれは従来と変わっていないのかもしれない。演習は“演義”に変わった。名前の由来は“三国志演義”で池部晃生先生の命名と聞いている。演習問題を解いても良いし、セミナー形式でも良いし、両方やっても良いとされた。

教育制度の他では、数学教室の全部屋に空冷式冷房機が取り付けられた。スト中の6月頃か、教授室にだけ空冷式冷房機が取り付けられた。学生はここぞと「教育の場である教室・セミナー室をさしおいて教授室から冷房機を取り付けるとは何事か」とかみついた。そしたら、2週間もしたら全部屋に空冷式冷房機が取り付けられたのである。この金はどこから出たのであろうか、教室の全予算を冷房機に注いだのか、それとも文部省から学生対策費としてぶんどってきたのであろうか、と訝った。

学生親睦のためにと、野球道具一式を希望したらキャッチャーミット・ファーストミットも含む一式を買ってくれた。エネルギーをスポーツに発散させることに異議はなかったであろう。チームを組んで練習や試合をした。野球となると藤木明君が高校野球部の実力でピッチャーを勤め、結構勝った。ソフトボールのときは私がピッチャーをした。いい球を放るからではなく、他に使い道がないからである。守備は下手で、ピッチャー・フライが上がると「まつもと、どけー」の声がかけられて私の真上の球でも内野の誰かが取った。

5. しかし、今年度はどうする

改革制度は定まったが、今年度をどうするかは別である。少なくとも、数学科は10ヶ月に及ぶストライキで授業がなかったから、このまま通常の単位認定をすると全員留年となる。それはまずい（だろう）が、1年分の講義を2、3ヶ月に集中して開講するわけにもいかない。そこで、新年1月・2月の2ヶ月間、学生はどれかのセミナーを受講し、その内容により単位の一括認定を行うということになった。基本的には all or nothing である。在籍する4回生全員がセミナーを受けられるように、数学教室の教員全員（助手も含む）の他に数理解析研究所の有志の先生もセミナーを開講した。もちろん、強制ではなかったので、数学教室の先生でもセミナーを開講しなかった先生もいた。学生の希望にしたがって各学生が受講するセミナーが決定された。全員第一希望が認められたから、20人近い学生のセミナーもあれば、2人だけというのもあった。成績を認定するセミナーのほかにオブザーバーとして別のセミナーに参加することも認められた。

さて、私はどのセミナーを受講したかという、かくのごとくである。セミナーの希望提出締め切りが来る前のある日、旧館2階を歩いていて、南東角の大会議室(今は非常勤講師室)の隣の永田先生の研究室(今は職員休憩室)の前まで来ると突然ドアが開いて永田先生が出てきた。先生は私に気づくと「松本君、僕のセミナーを取らない?」と声をおかけになった。私はまだ希望を決めあぐねていた。確たる決意が定まっていない状況では九州人に断る選択肢は無いのである。九州人は「心意気」をととても大切にするのである。というわけで、永田先生について代数幾何を勉強することになった。群論の基礎(土台)さえ怪しい私が、1階・2階なしで屋根を葺くようなもので極めて不安であったが、それが九州人の道である。

すべてが定まって1969年が暮れた。

6. 新年カルタ会

年が明けて、近々セミナーが始まるという頃、久しぶりに故郷で正月を迎えた仲間が次々と京都に帰ってきた。しかし、長いストライキの結果に納得がいかないのか、皆元気がなかった。これではいかな、と思って、何か盛り上がるイベントをやろうと思い立った。親しい何人かに何をしたら良いか聞いたが、良いアイデアが出ない。思いあぐねて、たまたま空を見上げたら、冷たく晴れた夜空に凍れる満月である。「正月」「月」「無念」とくれば、熱海の海岸の間寛一である。寛一は宮を蹴つ飛ばすのであるが(近代DV第一号)、海岸へ出る前は「カルタ会」である。そうだ、カルタ会をやろう。(尾崎紅葉の「金色夜叉」をある東大生が“オザキモミジのキンイロヤマタ”と読んだとの報道があり、知性の衰退が嘆かれたのがこの頃である。)

皆も賛成してくれた。それからは私は会場探し、百人一首の揃いを数組確保、みんなへの広報、正月はミカンだからミカンとお菓子を買うお金の調達(もちろんカンパを募る)と大忙しとなった。会場は、私の下宿のおじさんおばさんをお願いして、続きの座敷と仏壇の間を借りることができた。百人一首は京都に実家のある数人に頼んだら4組揃った。広報は口コミと掲示板。カンパは教員の方々を回った。1ヶ月余前まで長期ストライキで対峙していたのに気後れするなど思いつきもせず数学教室のすべての先生を廻った。そういうところは平等主義が徹底している。カンパの額はまちまちで、嫌だとおっしゃる方もいた。西野先生の部屋に行くと、「カルタって、いろはカルタですか?」と聞くので「百人一首です」と答えると「ほう」と感心されて、「みなさんお金を出しますか?」と聞く。「出す方も出さない方もいます」と答えると「では出さなかった方々の分も」とおっしゃってお札を1枚カンパ袋に入れてくださった。お札はこの1枚だけであった。それでも、ミカンとお菓子を買うには十分な額が集まった。

皆はといえば、付け焼き刃の百人一首の学習である。「むすめふさほせ」はもちろん、それ以外の歌も上の句の出だしの5文字と下の出だしの7文字の対応を覚える便法である。「あい見ての」とくれば「むかしはものを」である。とはいえ、出だしの「あさぼらけ」は2つあるから次の「宇治の川霧」か「有明の月と」まで聞かないと取れない、とか、なかなか難物である。邪道だ、という声もあったが、限られた時間内に結果を出すにはこれしかない。

カルタ会の当日、何人集まってくれるかなど不安であったが、学生が10数名と、土方先生と数理解析研究所の中野先生が来て下さった。数理解析研究所までは掲示を出していなかったのも、中野先生の参加はとてもうれしかった。友人がヤクザと間違えた土方先生が日本文化に深い造詣と愛情を持っておられることも、そして笑い顔がチャーミングなこともこのとき分かった。

対戦は、4人1組のチームを作って、向かい合わせ計8人で取り札2組200枚を取り合う団体戦と、1対1で向かい合い取り札100枚中の50枚だけを使って取り合う個人戦を行った。団体戦では取り札が常に2枚あるから2枚とも取らないと優勢にならない。個人戦では読み札の半分が空札なので焦ると無い札を取ってしまってお手つきとなる。

みな、それぞれ得意札があって、勝負が拮抗し盛り上がった。昼過ぎから夕方まで大いに楽しんで心が活性化した。これでセミナーに積極的に取り組める気がしてきた。

すべてが終わって解散した後、部屋を貸して下さった大家さんにたくさん残ったミカンと駄菓子をお礼として寄付した。ところが、おばさんがプンプンしている。聞いてみると「皆、礼儀正しいのに、あの院生1人ふんぞり返って教授と慣れ慣れしく話していて感じが悪かった」とのこと。土方先生のことである。「お若く見えるけれどもあの方は助教授で学生ではないのです」と説明したら納得して下さった。土方先生はよくよく間違えられる方である。

[思い出： 下宿事情] 私の下宿を京都大学のすぐ近くに確保できたのにはいきさつがある。大学合格の通知と共に「学生部で下宿の斡旋をする」旨の文書が送られてきた。入試の後「きっと不合格だから、なんと言って浪人を許してもらおうか」ばかり布団の中で考えていた私は合格通知に接して腰が抜けたように腑抜けになった。仕方がないので父がくだんの文書を持って単身京大に出向いた。ところが京大の学生部は合格者本人にしか下宿を斡旋しない、と言う。そのようなことは文書のどこにも書いてないではないか、仕事を休んで遠路宮崎から出てきたのに何も決めずに帰るわけにはいかない、と父も粘った。そこへおばさんが来て募集していた2部屋のうち1部屋が決まったとのこと。困り果てていた学生部の担当者はこっそり父に「このおばさんについていって下さい」とささやいた。父はおばさんについていって残る1部屋を借りることができた。北向きの4畳半だが、京大教養部に徒歩15分の絶好のロケーションである。部屋代が4千円であった。引っ越しの折、家にあった父の軍用行李を使った。軍人であったことに誇りを持っていたおじさんがこれをとても喜んでくれて、私を大事にして下さった。おじさんは柔道・剣道・居合道・空手・少林寺拳法あわせて20段ほどの段位を持った方で、京大病院の事務長をされた方であった。

昔のこととはいえ、火事の危険があるから電気こたつ以外の暖房具はダメ、洗濯は下宿に洗濯機がないから洗濯板で手洗い、風呂は銭湯、トイレは共同であった。寒い冬の底冷えと手が切れるような冷水での洗濯が引き金となって設立記念号の(1)に書いたように生涯にただ一度の鬱になった。さいわい、2回生に上がるときに南向きの6畳の間が空いて移ることができたこともあって、立ち直れた。宮崎人には太陽が欠かせないのである。このころ、1畳千円が相場となって部屋代が6千円になった。2年目から中学・高校から一緒に法学部の岩崎君がこの下宿に移ってきて、持ち前の強引なほどの明るさで下宿の雰囲気を一気に変えた。1年目は下宿10部屋の半分近くが社会人であったし、大家さんの口癖が「学生はなにするか分からん」であった。ところが2年目の暮れには大家さんがポケットマネーで下宿者全員御招待の忘年会が開かれるほどに明るくなった。結局、結婚するまで10年ほどこの下宿にいた。下宿の子供に数学を教えて夕食をごちそうになったり、5つ6つ下の4回生の就活にあたりネクタイの結べないものに結んでやったり、下宿に住みつくと「ぬし」になった。

7. セミナー開始

いよいよセミナーが始まった。永田先生のセミナーは代数幾何の分野で、学生が5人

ほどいた。正確な数は思い出せない。教科書に日本数学会が出版している O. Zariski の *Introduction to the Problem of Minimal Model in the Theory of Algebraic Surfaces* を使うというので永田先生が購入の手続きをして下さった。とても薄い本だが（だから）難しかった。局所的には証明が分かるのだが、全体として何をしているのかが分からない。あっという間にまたもや五里霧中である。2, 3回セミナーをしたら、永田先生が「君ら分かっていないよだからこの本はやめましょう。Zariski-Samuel の *Commutative Algebra* I, II の中のどの章でも良いから各自決めて読んできて下さい」とおっしゃって、方針変更となった。教養部の時の吉沢先生の時と同じである（設立記念号 (1)）。歴史は繰り返す。今回のテキストは、図書室が持っている本から作った青焼き原稿が事務室に置いてあって、学生は青焼きコピーをただで作ることができた。青焼き原稿は、めばしい教科書の分は揃っていた。本が好きな私は、これらの青焼きコピーを作って、製本して飾るのが好きであった。*Commutative Algebra* II は 407 ページもあるので2つに分けてそれぞれの表紙にゴーギャンの絵を貼って大事にした。大事にするとあまり読まない。（この頃の高橋版事情については創刊号の三木先生の文章に詳しく書かれている。青焼きコピーも同じ感覚である。青焼き原稿に「京都大学数学教室」の印が登録番号入りでしっかり写っているから、法律に反している、という感覚は無かったのであろう。）結局、ほぼ全員違う章を読むことになった。私は7章 *Polynomial and Power Series Rings* を読むことにした。今から見れば簡明きわまりない冪級数の収束条件が、未だあいまいな状態だった私は、形式的冪級数ならば収束条件が要らないから楽だと思ったのである。この章は良く分かった。永田先生の、代数学全体を見渡したお話も後押ししてくれて、晴れやかというほどではないが、霧は出てこなかった。後年、「擬微分作用素の表象の漸近展開」に形式的級数として独立の市民権を与えるときに、自分は代数的に正しい道を歩んでいるという自信を持てたのはこのときの学習のおかげである。

オブザーバーとしては、隅広さん・丸山さん連合のホモロジー代数、西野先生の多変数関数論なども覗いたが、溝畑先生のディスクリプションだけが最後まで続いた。こちらは、オブザーバーで気軽だったっからか、霧もなく視界良好であった。

8. 第1回院入試挑戦

前年の8月末の予定であったのに、ストライキのために延び延びになっていた院入試が2月に行われると告示された。実力など顧みず受けてみることにした。みんなも卒業単位は揃うかもしれないが就職先がないので、とりあえず院でも受験しておこうかと思ったのか、例年にない大量受験となった。

しかし、何よりも、自ら改革を申し出たレポートを書かなければならない。テーマは「“矛盾”の数学における意味付け」とした。理学部の学生集会で「何言ってんだー、ムジューンだよー」という罵声をよく聞いたが、“矛盾”という言葉の使い方としては妥当と思えないことがしょっちゅうあった。論理に厳密な数学では“矛盾”をどういう風に定義して理解しているのか、知りたかったからである。無謀にも、2週間ほどで基礎論の本を1冊読み上げてレポートを仕上げた。

試験初日は筆記試験、すなわち、数学基礎（必答）、数学専門（8問中(?) 3問選択）、語学（英語と仏・独・露から1カ国語）である。数学は五里霧中に立っているが、それなりにできたと思った。語学は2カ国語まとめて行われ、時間配分は自由・持ち込み可であった。英語に時間を取られ、第二外国語のドイツ語にはあまり時間が残らなかった。2年ぶりに読むドイツ語はちんぷんかんぷんで、できない学生の常で単語毎に辞書を引いて適当な訳語を下に書き、それらの日本語を適当につないで日本語の文章らしくする。と

ころが、ある文章の文末に前置詞のような単語がある。変なところに孤立してあるこの単語の処理に苦慮した。タイムアップ寸前に「ドイツ語には分離動詞があった」と思い出した。おまけに、分離動詞は「分離しない分離動詞」と「分離する分離動詞」がある、などを思い出したが手遅れであった。ドイツ人は論理的であると言われるが、このような奇天烈な文法に則って会話できるということは相当頭の回転が良いのであろう。

午前中の2つの数学の試験が終わって昼食を取った後、気分転換に談話室（旧第5講義室）にマンガを読みに入ったら、この部屋が外部受験者の控え室になっていて、「問題1はああ解いた」「問題2はこう書いた」と意気軒昂である。その会話を聞いて、合格定員から見て、私の合格は無理だと思った。

2日目はプレゼンテーションである。望んで作ってもらった新しい試みだから気合いが入る。集合時間よりだいぶ早く旧館の2階廊下を歩いていたら永田先生に出会った。先生は開口一番「君ってできないのねー」。晴天の霹靂に「いや基礎の1番はこう解答したのですが」と言うと「ほら間違ってるじゃないの」と間違いを指摘された。「でも2番はこう解答しましたが」と言うと「やっぱり間違っているじゃないの」。説明を聞くと、なるほど先生の言うことがもっともだ。それ以上抗弁する気になれなかった。数学全体200点で1割あったかどうか、とのことであった。意気消沈、やけくそ。そうならば不合格は確定、怖いものなしでプレゼンテーションできる。プレゼンテーションはうまくいった。質問にも的確に答えられた。ただ、ある論理式を証明せよという問いに、グッと黒板を睨んで証明式を上から完璧に書いたら、「変わってますね、普通は仮定からいくばくか下りて、結論からいくばくか上って、うまく間をつなぐものですけどね」と言われた。これにはムツとした。詰め将棋の答えを聞かれて、はじめの方と終わりの方とをぼちぼちしゃべる者はいない。頭から詰みまで一気に示す。答を聞かれたから答を示したままで、答の見つけ方を聞かれたら違う答え方をしたであろう。

院入試の前に京都で開かれた日本数学会の基礎論分科会の講演を聞きに行ったところ「LKとLJの中間の証明体系の濃度」というような講演ばかりで、つまらないと思っていたこともあり、発表が終わったとき洗面台で手を洗いながら「現在は基礎論に興味をなくしているから、もし院に入学できても基礎論はやりません」と宣言した。実は、世界の基礎論研究では面白い成果がどんどん出ていたと後に聞き知った。若気の過ちであった。

最終日は面接である。後で聞くと、当落のはっきりしているものは「院に入学できたら奨学金は要りますか?」との質問だけで、ハイでもイイエでも「ご苦労様でした」であったそうだ。例外が数人あり、別の3部屋に分かれて1人あたり30分以上の口頭試問がなされた。私も例外組であった。面接の冒頭、吉沢先生が「紙の試験では不合格確定かと思ったら、昨日の発表は良かったとの報告があった。しかし、院に入っても基礎論はやらないと言ったとのことである。そうすると代数・幾何・解析のどこかに研究テーマを求めなければならない。それが可能かどうか、もう一度3分野の実力を調査する」と宣言して3分野のそれぞれについての口頭試問が始まった。代数はほぼダメ、幾何は全くダメ。解析にいたる頃には2時間が過ぎて他の2部屋の長時間面接がすべて終わった。「なんだまだ面接をやっているところがあるぞ」との声がしてゾロゾロ他の部屋の試験官も私の面接室に集まってきた。学生1人を、数学教室・数理解析研究所の数学関係教員全員が山のようになって取り囲むことになった。「有理数上で定義された連続関数を実数上の連続関数に拡張できるための条件を述べよ」と聞かれた。当てずっぽうにいろいろ答えたが、「当たらずとも遠ざかる」で結局正解は出せなかった。すべての試問が終わったとき、数理解析研究所の村松壽延先生が「君には方法論がないね」とおっしゃった。「方法論」など考え

たこともなかったもので、方法論とは何ですか、と聞いたら、「たとえば連続関数の試問で、実数上の連続関数に拡張できたとすれば有界閉区間上で一様連続になっている。であれば元の関数は有理数上の有界閉区間で一様連続でなければならない。こういう風に理詰め条件を探すことですよ」と言われた。私は“方法論”を強く意識してその後の学習や研究に取り組み、大いに有効であった。生涯を支える良い言葉をいただいた。長い長い口頭試問は3時間半で終わった。何もまともには答えられなかった。自分が全く何も分かっていないことがハッキリした。

当落発表では、当然「落」であった。機会があって吉沢先生の部屋に伺ったとき、院入試の印象を聞いたら、「君らは偉そうなことを言うから相当できるのかと思ったら目も当てられない結果だ。2人を除いて顔も見たくない」とおっしゃる。おそろおそろ「2人は誰ですか?」と聞いたら私の名前も入っていた。プレゼンテーションを高く評価していただけたようだ。リップサービスもあったかもしれない。勉強し直してもう1回チャレンジしようと思った。

私はとにかくもう一度勉強し直さなければ恥ずかしくて社会に出て行けないという思いが強く、大学院入試の挑戦は「ついでに」のようなあいまいな気持ちからであった。ところが、私より明らかに優秀な学友が「大学院はあきらめた」と言う。なぜと聞くと「自分の能力では研究者は無理だと言うことが分かった」と言う。複雑な気持ちであった。あいつに研究者が無理なら、俺にはもっと無理だと思われるからである。それでももう少し勉強してみたい、と言う気持ちだけで院入試の再挑戦をあきらめなかった。後々、人間には伸びしろがあるから、今の自分には無理でも10年後の自分には可能になることもある、と思うにいたった。中堅技術者を目指す龍谷大学の学生にもそのことは伝えた。

それにしても不思議だったのは、合格者が私の学友ばかりで外部受験者は1人もいないことであった。初日のところに書いたように、外部受験者に相当できる者がいたはずなのに。内部者優先のハンディが彼らには課せられていたのかと訝った。半年後にこの点に関する理由（の一端）に思い当たることになるが、それは次回に述べる。

9. 就職戦線異状あり

「院入試を目指すのならば卒業しない方がよい。卒業単位が揃って気が抜けないように」との永田先生の配慮で2単位だけ残された。私の留年が決定した。10人弱が院進学を決めていた。残りの仲間は卒業単位が揃っても就職先がないから、新卒採用しかなかった時代、卒業するわけにいかない。ところが、ある日仲間の1人が相談に来た。セミナーの先生から呼び出しがあって、「卒業しませんか」と言われた。就職が決まってないからと答えると「就職は世話します」とのこと。人間は天邪鬼で、「出て下さい」と言われると出たくなるものである。本人の留年したい意思が堅いことを確認して、彼の指導教員のところに向いて「本人が出たくないのに卒業を強制するのはいかんでしょ」と言うので直ちに「結構です。〇〇君は留年ということにいたしましょう」と簡単に決着がついた。2, 3人留年をもらい受けた。こうして70人ほどいた卒業可能学生の10人弱が大学院、40人ほどが一流企業に職を得て卒業した。残り20名弱が、就職斡旋つきの卒業を蹴って次の院入試に向けて留年した。長期留年者が一掃されたのだが、結局数字の上では留年者数は平穏な年度と変わらないところに落ち着いた。

こんなどさくさ紛れの卒業で、就職先から苦情が来ないかと心配したけれど、そういうことはなかったようである。研究者になる以外に広く才能を生かす道はあるから、必修科目を設定して学生を縛るのはやはり良くないのだと思った。

10. みんな納得の研究分野の変更

すべてが定まった年度末ではあるが、私にはもう1つしたいことがあった。研究分野の変更である。形式的冪級数環の勉強は面白かったが、時代的にこれを研究テーマにして良い研究をするのは無理だと思った。一方、未だ代数幾何は遠い彼方である。そこへいくと、ディストリビューションの理論は分かるし偏微分方程式論も何とか分かりそうである。なにより、こちらの方が気持ちがワクワクする。これは研究室を移動するしかないと思い定めて溝畑先生に相談すると「永田君が良いといえば来ていいですよ」とのこと。永田先生に「解析の方が向いているようなので研究室を替わりたい」と言うと「そうね、君は解析の方が向いているかもしれないね」と許可が出た。それで、新年度からは溝畑研究室の所属となることが決まった。このことが決まってから、廊下で数学教室の教員の方々に会うと例外なく「溝畑先生ところに移るんだって?よかったよかった、君はどう見ても解析だよ」と言われた。数学教室全員に納得・祝福された移籍であった。